



勇気の歌



案山子 (Read Me. 47G)

そこは駅の近くにある地下道だった。

行き交う人々の表情はさまざまだ。腕時計を見ながら忙しそうに歩くサラリーマン。友達同士で仲良くおしゃべりをする女子高生。ヘッドホンをして音楽の世界に浸る青年など。皆それぞれ、自分だけの人生を歩んでいるのだろう。

そんな中、地下道の片隅でひたすらフォークギターをかき鳴らして歌う中年がいた。歳は、だいたい四〇代後半だろうか。髪の毛や髭は伸びっぱなしで、とても清潔感があるとは思えない風貌だった。

だが、その男は異様に目がキラキラしていた。

男が歌う内容は、日常に対する不平不満や理不尽、不条理が目立つが、それだけではなかった。それらに相反するかのように、世の中の美しさを歌っているのだ。それは自然の美しさといった目に見えるものだけではない。人知れず努力をする者。諦めず立ち向かう者。自分の瞳を流れる涙を飲みながら、苦渋に耐えて必死に生きている者達の姿を歌っていた。

男は自分の魂を捧げるかのように歌っていた。

だが男の風貌の所為もあって、なかなか人は集まらない。男の姿はどうみても浮浪者にしか見えないからだ。ボロボロの服。痩せこけた顔。おそらく、ここ数日まともに飯も食べてないのだろう。

それでも男は歌い続ける。この世界を覆う、ありとあらゆる感情を歌っている。

すると、一人の若い女性が男の前にしゃがみ込んだ。まだ真新しい黒いスーツに身を包んでおり、ツヤツヤしたショートボブの黒髪が印象的だ。

彼女は真剣な眼差しで男を見つめたまま、歌を聴いている。男はとくに若い女性を意識することなく歌い続けていた。

だが、突然ギターを弾いていた男の手が止まった。

それは――若い女性が、突然泣き出したからだった。

その光景は、男にとってあまりにも衝撃的な出来事だったのだろう。彼は彼女に声をかけられずにいた。それは、歌うことを止めたことにより、気ままで気にもしなかった喉の渇きや空腹に、気が付いた所為だった。

彼女は泣き続けている。男の歌に、詩の内容に、なにかしらの影響を受けたのは間違いない。

それは、自分が望んでいた仕事ではなかったことによる後悔の念か。

それは、信じていた人に裏切られたことによって生まれた絶望の感情か。

それは、ずっと忘れていた自分の身の回りにあったはずの優しさに気付いた瞬間か。

いずれにせよ、彼女の心の中で解き放たれた感情は、そう簡単に収まりそうになかった。

男はじっと見守ることしかできない。所詮、もう歌うことでしか自分の気持ちを伝えられないかのように。

だが声が出ない。腹が減って力がでない。

すると、駅の売店で働くおばちゃんが、男の前までやってきた。

その手には、売店で余ったコッペパンとミルクがあった。

おばちゃんは、黙ったままコッペパンとミルクを男に渡す。奪い取るようにして男はそれらを手に取った。

よほど喉が渇いていたのだろう。

よほど腹が減っていたのだろう。

だがそれだけが理由じゃない。

はやく、彼女の涙を止めたい。

その方法は今の彼にとっては歌を歌うという手段しかなかった。男は必死にパンを食べ、ミルクをがぶ飲みした。

その後、男はひとつ深呼吸をしてからギターを手に取り、六弦がそれぞれ正しい音を出すかどうか確認する。

――そして男は歌った。

この世界は、辛いことや悲しいことばかりではない。

人の優しさに気がつけないことだってたくさんある。

でも人は苦しみを体験しなければ成長できない。失敗しなければ成功に至れないのだと。

――そして男は歌った。

その心が深い哀しみに満ちてもなお、人は歩き続けなければならない。

なぜならその鼓動は確かなリズムを刻んでいる。

私は生きているのだと必死に伝えている。

その貴き音を聞け。唯一無二のその響きを知れ。

そしてそれを今の今まで、

止めずにいられた自分自身の本当の強さを誇れ。

男は必死に彼女を励ました。

それは、この世でたった一つの勇気の歌。

解き放たれた歌声は、いつのまにか多くの聴衆を集めていた。

痩せこけた表情をしていた男の顔もまた、いつかのあのときのまま、輝かしい、喜びと優しさに満ちた顔をして
ていた。

だが、彼女の涙は一向に止まらない。

男は少し不安になったが、それでも彼女の表情を見たら安心したようだった。

彼女の表情もまた、男のように輝かしい微笑みをしていたのだから。

—————It is a song of only one courage in the world.closed.